

# 「3年ぶりの全国大会を終えて」

東海大学付属第四高等学校中等部

男子バスケットボール部

監督 嶋村 圭太

8月24日、広島グリーンアリーナ。青森県津軽中戦の終了ブザーが鳴った瞬間、「全国制覇」の夢が途絶えました。生徒達と歩んできたこの一年間で感じたことを、大変恐縮ではありますが綴らせていただきます。

## ①春季大会までの長かった半年間

(この項が異常に長くなってしまったのは、この半年間がやはり長く感じたからだと思います。ご了承ください。)

3年ぶりの全国の舞台を目指して、さらには全中最終日のメインコートで日本一になることを夢見て、新チームが始まりました。ここ2年間の3年生達が悔しい思いをしてきた分、必ず今年は「夢と現実をつなごう!」という気持ちで、夏休みの時期から意識の高い練習ができていたと思います。

しかし、突きつけられた「現実」は、インフルエンザの波に飲み込まれ(学校閉鎖期間が大会と重なり)、新人戦棄権というものでした。新チームのデビューすらできない状況にチームは揺れました。私自身、学校側の人間として冷静に受け入れなければならないことと、何とかしたいという気持ちの両方で、もどかしい思いをしていました。選手と保護者に対して申し訳ない思いもありました。(おそらく、このように感じられた指導者の方々は大変多かったと思います。)また、後になって「地元に戻ろうかなあ…」と悩んでいた生徒もいたと分かり、改めてこのチームを率いている責任の重さも実感しました。

でも前を向くしかなく、プラスに考える、つまり「目先の大会にとらわれず、じっくりチームを作っていくことができる」ということを常に生徒にも伝え、ファンダメンタルをさらに徹底した練習を心がけました。さらには保護者のご理解・ご協力のもと、正月に埼玉県の「ガウチョーズカップ」に参加し、全国レベルのチームと戦うことができました。

また、冬の選抜期間では多くの選手を札幌選抜・北海道選抜で面倒を見ていただき、関係の先生方のおかげでいい経験を積ませてもらえたと思います。

そして、札幌地区春季大会では、キャプテン中村の怪我もあって改めてピンチに陥りましたが、ピンチをチャンスに変えてきた半年分の思いでチームはより一層まとまり、無事に優勝することができ、ようやく周りのチームに状況的に追いつくことができました。

## ②全市大会～全道大会

札幌全市～全道大会の間で一番苦勞したのは、やはり全市大会決勝リーグの厚別北戦でした。プレスダウンの練習もしており、今年のチームは④中村のガード力が安定していたため、ゾーンプレス～ゾーン自体に慣れていないわけではありませんでしたが、厚北のそれはやはり異質で、どんなチーム相手に「リハーサル」をしても、結局肌で感じなければわからない、豊富な運動量の大変厳しいディフェンスでした。ディフェンス面でもドライブ～外のあわせにうまくリズムを作られ、厳しい戦いとなりました。

しかし、逆に考えればそれ以外の試合も、相手はおそらく我々を相手にゾーンディフェンスをしてくるだろうと思っていたので、ゾーンアタックの練習に時間を割くことができているとは思っています。全道大会でも、ゾーンに対して焦らず、構えず攻めることができたと思います。

### ③広島全中を通して感じたこと

全国大会に出てくるチームは、

- ①ディフェンスがいいことが普通。
- ②リバウンドの意識が高いことが普通。
- ③確実なシュートを確実に決めることが普通。

ということを3年前に山形にアシスタントとして行かせていただいた時のことも思い出しながら予想していましたが、今回改めて、まさしくそれに尽きると実感しました。全中に臨む前に、高校生や大学生との試合を通して、能力的な部分の差をどうカバーしようか考えることはできていましたが、やはり全国の強豪中学チームは、上の3つの点を能力的な意味でも、戦術的な意味でも徹底されているなど感じました。

能力や身長が足りなくても、豊富な運動量で人数をかけてプレッシャーをかけるディフェンスで、道予選まで決められていたシュートが決められない。タフショットの後でオフェンスリバウンドを取りたくても、強いボックスアウト相手になかなか飛び込めない。逆にディフェンスの一瞬のスキを徹底的に突いて確実にシュートを決めてくる。予選と決勝トーナメントと3試合戦わせていただきましたが、どの相手もこれら3点が共通していて、非常に戦いにくかったです。

さて、我々四中はというと、①も②も、出来ているときとそうでないときがある。出来ていないときに、オフェンスのリズムにも影響する。③も判断の部分で確実に2点取るために落ち着かせて一本取るどころと、思い切り良くどンドン仕掛け、どンドンシュートを放つところのバランスに欠け、リズムがよくても最後決められなかったり、浮き足立って攻め急いだりする部分がありました。もちろん、試合の中で流れがあるので、出来ているときと出来ていないときの両方があって当然ですが、これらをどれだけ徹底するかで、流れを自分たちに持ってくる時間帯が長かったり、爆発力が高かったりするのだと思います。予選2試合は自分たちのバスケットをできた時間が一瞬でも長かったり、波に乗ることのできた時間帯があったのに対し、決勝トーナメントの青森津軽中戦では、「つかみかけた流れを持っていくことができたかどうか」と、「1試合を通してプレッシャーを与えたディフェンスをし続けられたか」、…この差で敗れたと分析しています。(敗れた相手の津軽中は、次の秋田泉中との東北対決で、1試合通して相手のエース2人に対してフェイスガードの徹底マークをしながら、さらにアウトサイドシュートが大爆発してボディブローのように効いていました。)

そして、優勝した本丸中や、優勝候補であった京北中は、この上にさらに個々で打開することのできる選手が複数いるように見えました。土壇場ではやはり1対1の能力…。

そう考えると、組織的な約束事の徹底+個々の能力育成。これを年間通して意識し続けられなければ、上では勝つことができないと強く感じました。

また、公開練習一つ見ても、どのチームも試合前だからといって一切手を抜くことなく、全力で取り組んでいました。練習で絶対手を抜かない、ということに関しては我々もかなり意識しており、それなりの自信を持っていましたが、これもまた、それができて「普通」なんだなと痛感しました。(特に地元の国泰寺中の練習には感銘を受けました。全校応援で大歓声を浴びるのにふさわしいチームだなと感じました)

#### ④今後の課題

夢の「全国制覇」まであとたったの4勝でしたが、その4勝を実現するにはまだまだ越えなければならぬ壁が高くそびえ立っているように思えました。私自身まだまだ勉強不足ですので、これまでの経験を生かして、今回の敗退は次のステップへと進むチャンスだと思って、また頑張っていきたいと思います。具体的には、「徹底することや継続すること」「戦術的な引き出しを増やす（特にプレス・ディフェンス）」「全国レベルのシュート力」など、きりがありませんが、一生懸命ひたむきに取り組んでくれる選手達や、声が枯れるまで応援してくれる保護者の方々、色々アドバイスをいただける指導者の先生方や、大会を支えてくれる生徒や先生方・審判の皆様、そしてバスケットボールという素晴らしいスポーツに感謝しながら、指導者として、一人の人間として成長できたらと考えています。ありがとうございました。